

## 「小野崎氏と根本氏」 海老根 敬

### 1 藤原 鎌足

(鎌足～不比等～房前～藤原北家～魚名流)

- 614年 (推古 22年) 中臣御食子の長男として生まれる。
- 636年 (じょ明 8年) このころ唐から帰った僧、みんな学ぶ(23歳)。
- 644年 (皇極 3年) このころ中大兄皇子と知り合う(31歳)
- 645年 (大化元年) 中大兄皇子を助けて蘇我蝦夷、入鹿を討つ。(32歳)
- 668年 (天智7年) 近江令の制定に中心的な役割を果たす。(52歳)
- 669年 (天智8年) 大職官と大臣を授かる。(56歳)

天皇より藤原姓を受ける。近江大津宮で亡くなる。

孝徳天皇の大化元年(645年)大化の改新に功労があった。

鎌足より8世には「倭藤太」こと、藤原秀郷がいる。

琵琶湖西岸、天智天皇が、667年飛鳥から遷都した大津宮があったとされる。672年壬申の乱で勝利した大海人皇子(天武天皇)が飛鳥に都を戻したためわずか5年で廃絶した幻の都であった。近江遷都の背景に朝鮮半島、百済救護のために出兵し、新羅と唐の連合軍に敗北した、663年白村江の戦いで敗れた百済の人々が琵琶湖付近に移住。国の防備のため飛鳥から大津に都を移したとされる。

### 2 藤原 秀郷

平安時代中期の貴族、豪族、武将。

室町時代に「俵藤太絵巻」が完成し、近江三上山の百足退治の伝説で有名。元は下野大擾であったが平将門追討の功により従四位下に昇り、下野、武蔵二国の国司と鎮守府将軍に叙せられ勢力を拡大。死後、正二位を追贈された。源氏、平氏と並ぶ武家の棟梁として多くの家系を輩出した。

奥州藤原清衡、佐藤義清（西行法師）九州の戦国大名大友宗麟を生んだ武門の血脈である。

秀郷の末裔を称する家を列挙すると常陸国に小野崎氏、那珂氏、江戸氏、川野辺氏、小貫氏、根本氏、赤須氏、茅根氏、大久保氏、助川氏、滑川氏、綿引氏、内桶氏、水谷氏、佐藤氏、安島氏、赤津氏、平沢氏、石神氏、額田氏、荻津氏、久米氏、小野瀬氏。

下総国に結城氏、下河辺氏、伊藤氏、下野国に佐野氏、藤原足利氏、小山氏、長沼氏、皆川氏、薬師寺氏、田沼氏、下野小野寺氏、榎本氏、

### 3 小野崎氏

藤原秀郷の5世が公通、子の通延が始めて常陸国に下向し1109年(天仁2年)に久慈郡太田荘に築城し太田太夫と称した。

次弟の通直は那珂郡河辺郷に土着、河辺太夫と称して平沢氏の祖となる。

三弟の通近は岩瀬庄に土着岩瀬太夫と称し小貫氏の祖となる。

通成の子通盛(通威)が1150年瑞竜小野崎に進出築城、小野崎太夫または新太夫と称し、これがそのまま小野崎氏の家格となり現在に至っている。

現在常陸太田市瑞竜中学校となっており、その一角に昭和60年8月に建立した「小野崎城址」の碑がある。通盛＝戸村系図より。通威＝新編常陸国誌より。

通成には四人の子があり、長子が通盛、次子通高は赤津氏を立て、三子盛道は太夫三郎と称し根本城を築城、根本氏を立て、四子彦四郎通頼は赤須に築城赤須を立てている。これが後本家小野崎氏の四天王、家老となって本家を補佐した。

平将門を平定するのに大功のあった、下野国田沼の唐沢山城主、藤原秀郷を祖とする通盛が久安年間に久慈郡佐都荘に土着その後小野崎城へ。その子通長が京都から下向した清和源氏の佐竹昌義に臣従した。

小野崎氏は友部、山尾城へと次々に移り、さらに分流の石神氏は石神城へと移動して、佐竹氏の守護代とゆう家格で、政治軍事面で大いに活躍してきた名族。

山尾小野崎氏と、石神小野崎氏、二系統がある。江戸時代は秋田藩士宿老となる。額田小野崎氏は佐竹宗家に滅ぼされ滅亡した。

## 4 山尾城（十王、友部）

山尾小野崎氏の本拠地であり、現在城址に十王中学校が建っている。山直城、山能城ともいわれ、地名では「新館」といい古館である友部城に対応したものである。

建武年間（1370年頃）に築城され、友部城から移った山尾小野崎氏の居城となった。

山尾小野崎氏は山城守を代々称し、佐竹氏から岩城に対する備えとしての役割を担っていた。

しかし山尾小野崎氏は、山入りの乱、乱末時に反抗した為、佐竹16代宗家は岩城氏と同盟し、岩城氏が山尾城を攻めたことが資料で明らかになっている。

乱後小野崎氏は没落し、佐竹17代義篤の4男を養子とする。この人物が小野崎義政であり、この時佐竹氏による大幅な改修がほどこされ、現在の遺構になったとされている。

佐竹氏が秋田移封のため廃城となる。

## 5 石神城（東海、石神内宿）

南北朝時代に、瓦新衛門が築城し永享年間に小野崎氏が攻略したといわれている。小野崎

氏は山入の乱に乗じた延徳元年（1489年）の奥羽勢の常陸侵入の際、小野崎道綱が討死し、その功により子の通老が石神350貫、河合350貫の加増を受け、久慈川の水運支配権を与えられた。

部垂の乱で義元側に属するが佐竹18代義昭の時代以降は、佐竹氏に従属した。

廃城は、佐竹氏の秋田移封時という。なお、久慈川の鮭を巡り額田小野崎氏と戦いとなり落城したという話が伝わるが、これは事実ではない。しかし鮭を巡る争いがあったようである

城は主郭が3郭からなり、東西200m、南北150mの規模を持つ岡城で、当時は東下を久慈川が流れていた。南北を堀で介した大土塁が囲む構造が特徴である。

城址は現在公園になっている。

秋田藩では石神小野崎氏、宿老として廻り座13番席。家格が上の山尾小野崎家より重職に就いた。

## 6 額田城

築城は建長年間（1219年～1255年）佐竹5代義重の子義直によるといわれている。

最初の額田城は阿弥陀寺、又は麟勝院の地にあったといわれている。義直は額田氏を

名乗り、南北朝の抗争で北朝方足利、佐竹氏を助けたが山入の乱で佐竹宗家に背いたため、

応永30年（1423年）佐竹13代義人（義憲）の攻撃を受け落城し、額田氏は滅んだ。

その後小野崎通重が額田氏の名跡を継いだが通重に子がなく江戸氏から通業を養子に迎え

以後額田小野崎氏となった。額田小野崎氏は独立志向が強く、山入の乱に佐竹宗家の所領を押領している。

最終的には、伊達政宗と通じたことから天正18年（1590年）佐竹義宣に攻められ、落城し、額田昭通は伊達氏を頼って仙台に落ち延びた。

城は額田の台地を大規模に堀と土塁で分断して造られ東西1200m、南北600mの

広さを持つ。特に本郭の堀は泥田堀で幅も深さも茨城県北一の規模である。外郭も土塁や空堀が若干、現存し、宿を包括した大規模城郭であった。

## (1) 神生の乱

江戸氏の内紛。その張本人の神生右衛門大夫を助け、佐竹義宣の支援を受けた7代水戸城主江戸重道と戦った。この時佐竹氏と対立していた額田昭通に正宗が江戸一跡を与えようと誘いをかけた。

## 7 小野崎昭通

額田城を出た昭通は那須大関氏(高僧、昭通の姑の夫)を頼り、日光中禅寺を経て、伊達政宗の客分として迎えられ、その後徳川家康の6男、忠輝に嫁いだ五十八姫の守臣として越後高田藩75万石に同行した。

秀忠から改易された後、水戸徳川家に600石の高禄で召し抱えられた。寛永7年(1630年)3月13日享年62歳でなくなった。

遺骨は本米崎上宮寺に納められたが後に額田久兵衛として水戸市酒門共有墓地に改葬された。

額田氏範囲—額田、向山、本米崎、田彦、稲田、外野、津田、堀口、

額田家臣—大窪采女、軍司、藤咲、住谷、大高、田奈部、(額田七百騎)

## 8 戸村城

戸村城は常陸の国那珂郡戸村(那珂市)、藤原北家秀郷の流れをくむ那珂氏系戸村氏によって築城。南朝側に付いたため佐竹氏によって滅亡した。

藤原姓の戸村は那珂通廉の次男、能通(通能)が那珂郡河辺郷に住んだのが祖。

清和源氏の戸村氏は佐竹義人(義憲)の子義やすが、大擾氏の養子となっていたが、後に実家に戻り戸村に住んだのが祖。(1160年)後に秋田藩重臣として5400石余を領した。

城は那珂川の東岸にある低地に面した台地の西端に築かれ、(北城)・(御城)・(南城)と呼ばれる曲輪があり、城址は宅地や畑となっているものの土塁と空堀が部分的に残っている。(南城)は那珂氏系戸村氏時代、(北城)は佐竹系戸村氏時代の本郭といわれている。

## 9 根本館 (白羽町)

久慈郡根本(常陸太田)発祥。

藤原北家秀郷、小野崎通成の次男、盛通が根本氏を称して居住し、以後18代にわたり在館した。江戸時代は秋田藩佐竹氏に属し秋田藩士となる。

里川左岸、里川を西の眼下に望む東の山地から延びる比高約20mの舌状台地の先端部にある。館北側は里川に流れ込む沢が侵食した崖であり、南側はやや緩い斜面、東側は台地平坦部に続く。

本郭は、東西約100m、南北50mの長方形。里川側の一段低い位置に腰曲輪がある。本郭の入り口は東側にあり、台地を遮断する二重土塁が設けられていたという。遺構は畑と宅地となりほとんど失われている。

## 11 川野辺氏

藤原秀郷の末裔で下野に居住。後に常州常陸国河辺郷に移り慶長7年に山方盛金にて土着したという。[山方町誌]

川野辺氏は当初那珂郡、久慈郡に勢力を持った武士であった。991年通直が常陸国に入り御前山野口の河辺郷に野口城を築城し、河辺太夫と名乗り城を継承している。その子通栄には二子あり嫡男通泰は那賀城（緒川村那賀）に入り那珂姓を継承した。次男の資明が川野辺氏となり野口城を継承している。川野辺氏は那珂氏とともに南朝方として瓜連城の楠木正家とともに佐竹氏と激しく戦い正宗寺に独松で自刃した。しかし那珂通辰の子通泰と川野辺光計は、久慈川を通り山方盛金の秘境高井釣に落ち延びた。那珂通泰は佐竹氏の軍門に下ったが川野辺次郎は南朝方として戦い、九州熊本の菊池武直に属し功をあげた。しかし吉野にて討死したという。次郎の子通保は南朝方として常陸にあったがその子通弘の時佐竹氏家臣となる。

川野辺家家紋は後醍醐天皇より菊の御紋を拝領している。

野口城には佐竹氏8代行義の六男景義が入り、その家系が以降野口氏を称するようになった。しかし山入りの乱や部垂の乱で、佐竹宗家に反抗したため野口氏は没落した。

## 12 江戸氏

江戸氏は藤原秀郷の流れを組む那珂氏の一族である。那珂氏は通辰が南朝方に味方したために、建武三年（1336）増井勝楽寺(正宗寺)の傍で自害するという打撃を受けた。生き残った子通泰は足利尊氏から那珂東郡に所領を与えられた。

通泰の子通高は佐竹10代義篤の娘を娶り、佐竹氏との関係を深め江戸氏を称したのである。小山若犬丸の乱の際に、嘉慶2年（1388）鎌倉公方足利氏満は上杉朝宗に、小田五郎、小山若犬丸の拠る難台山城(岩間町)を攻略させた。その時、通高は上杉軍に属して活躍し、戦死した。その恩賞として、氏満は、通高の子、通景に、大塚氏の旧領河和田（水戸市）、赤尾関(内原町)などを与えた。そこで通景は城を河和田に築いて江戸郷から移った。

さらに勢力拡大し、応永33年（1426）、平安時代に、常陸大擾一族が吉田郷から起  
こり、馬場大擾氏の祖資幹が築城した馬場館を大擾満幹から占拠江戸通房水戸城主となる。

## 勢力範囲と家臣(江戸重通時代)

中妻33郷、那珂川下流、涸沼

鹿島氏、小幡氏、河和田氏、加倉井氏、外岡氏、立原氏、海老沢氏、鯉淵氏、並木井氏、  
平野氏、打越氏、久保田氏、掛札氏、谷田部氏、篠原氏、(江戸千騎)

### (1) 江戸重通

天正18年（1590）正月、豊臣秀吉の関東制圧が開始され、佐竹氏や宍戸、  
真壁氏らは秀吉の陣に参加したが、江戸重通は参加せず北条氏小田原落城後に  
佐竹義宣から水戸城の明け渡しを求められる。重通はこれを拒み、12月に佐竹  
義重軍が水戸城を攻め陥落する。

重通は長男通升とともに下総結城氏の妻の兄、結城晴朝のもとへ逃亡し、江戸  
氏はここに滅亡する。

慶長3年（1598）10月重通は自害する。享年43歳、墓地は結城小田村  
の衣輪寺（廃寺）にあり、この時旧家臣の14人が殉死したという。道路の盛り  
土脇に、「江戸但馬守重通碑」と自然石に刻まれた碑が立っている。これは明治  
32年（1899）の建費碑で、榎本武揚の書であると刻まれている。この塚を  
土地の人々は水戸塚と呼んでいるという。

重通の子、宣通は徳川家康に仕えて水戸氏と改称、江戸時代には福井藩士とな  
っている。



## 1 3 那珂西城(城里町)

那珂通辰の城として県指定史跡になっている。しかし、現在では大中臣氏の一族の那珂氏によって鎌倉時代に築城されたと考えられる。尊氏より丹波に所領をもらい移住した。

真言宗法幢院(水戸光圀が復興)南北朝時代南朝の将通辰、佐竹氏と戦い自刃した勤皇の城としての那珂西城保存も考え上での処置。京より高僧似傳を招き中興開山し寺領300石を与えた。

「新義真言宗豊山派泉山宝幢院」光圀元服、御前髪を奉納せられ徳川祈願所となる。寛永11年11月約380年前、義公7歳の時の毛髪である。(源朝臣、光圀)(みなもとのあそみ))

現在の姿は佐竹氏の整備によるとおもわれ、山入りの乱で15代義治が1450年代頃太田城を追われこの要害那珂西城に籠ったとされる。佐竹氏が南方に軍事進出する際の軍勢集結地として使われた。廃城は天正18年(1590年)破城令による。

## 1 4 薩都 神社

常陸太田市里野宮町鎮座 (久慈郡二ノ宮)

ご祭神 立速日男命 (たちはやひをのみこと)

創建は、古く常陸国風土記の時代、延暦7年(788)、社を建て祀る。御岩神社は、薩都神社の奥宮、延暦19年(800)賀毘礼の峰に上り給う。(遷座の地となる)

常陸太田城主藤原通延の子通成佐都宮に住む、その子通盛小野崎の地に居城、佐都荘を治め、代々祈願所と定め、一族氏神と仰ぐ。

社殿

本殿 宝永2年(1705) 入母屋流造

拝殿 元文2年(1737) 入母屋造

神楽殿 拝殿と同年代と考える。

氏子 佐都郷3ヶ村。常陸太田市街より東北4キロの地、里美、小里を経て福島県東館、棚倉町に通じる所謂里川沿岸。

社宝 神刀(天国の作)

明治33年 秋田藩臣 元東大教授 根本通明奉納

小野崎氏後、佐竹15代義治の子、北家義信本社を修造。佐竹氏秋田移封後、徳川家光50石を供す。

## 15 佐竹氏

新羅三郎義光の孫、河内源氏流源昌義、1130年代初め頃佐竹郷に土着。20代約470年の祖となった。始めは馬坂城を拠点に領地を拡げ、太田城(舞鶴城、清龍城)を本拠とした。3代隆義までには那珂川流域以北の大半を支配したが、源平交代期に4代棟梁秀義が源頼朝の親征の金砂山合戦に敗北、奥州藤原氏征討などに参陣して復すまで一時所領、奥七郡を失った。鎌倉御家人へ支配権は移る。(宇佐美、二階堂、伊賀氏)

9代貞義の南北朝動乱時には足利方の有力武将として、東国決戦、その他で功をあげ、以後5代にわたって常陸国守護を世襲した。有力大名間の総力戦となった19代義宣の戦国末期には、常陸一円の外、宇都宮、白河、会津若松芦名氏などをまとめて北関東、南奥同盟を形成し、奥州伊達氏、小田原北条氏と再三にわたって合戦した。

20代義宣は1590年の水戸城攻略に始まる常陸統一で本拠を水戸に移し54万石を領したが、関が原合戦に際し大阪よりの行動などがあって、1602年8月秋田20万石に

転封となった。

## (1) 戦国期佐竹氏の権力編成

「洞」編成

佐竹氏は一族や国衆の家の自立性を保持しながら配下の領主層を編成統合。

1 「家中」として編成する。一門と譜代を中心とした集団。

イ「御一家中」－親類中 [佐竹御三家] 南家、北家、東家

ロ「近進中」－宿老以下、譜代家臣中心のグループ。

2 「洞中」として編成する分国支配

「館」－大擾氏、小田氏

「国人」－穴戸氏、笠間氏 [藤原北家宇都宮氏流] 太田氏、梶原氏

「一揆」－行方氏、鹿島地域平家大擾氏系領主

「国衆」－江戸氏、大塚氏、小野崎氏、[家格では御一家に準ずる]。

## 16 山入りの乱 (室町時代)

佐竹12代当主の義盛に男子がなかったことから藤原北家の勧修寺流の流れを組む関東管領の上杉氏より義憲(人)が婿養子に迎えられて佐竹13代当主となると、佐竹氏の庶家で佐竹の男系の血筋を引く山入氏はこれに反発、宗家に反旗を翻すことになった。山入氏が室町幕府と結んで佐竹宗家の常陸守護職を奪い山入の乱を起こしたこと、(佐竹師義一族9代貞義の7男師義) さらに名目上傘下にあったものの実際には独立勢力であった、平家大擾氏

や藤原秀郷流の那珂氏(後の江戸氏)の存在があったことから、佐竹氏の勢力基盤は脆弱であったといえる。こうした内紛もあり、戦国時代に突入した後も佐竹氏の常陸統一は困難を極め、戦国大名化も遅れた。しかし戦国時代になると佐竹氏16代当主で「中興の祖」と呼ばれた佐竹義舜があらわれ、1504年山入氏を討ち、常陸北部の制圧に成功した。

## (1) 山入の乱と根本氏

15代佐竹義治が根本石見守忠行の不忠を理由に根本一族を滅亡に追い込む。佐竹宿老の江戸道徹は根本氏を扶持したものの、小野崎越前守の考えに違わぬよう根本氏から「自訴之詫び言」を禁じた「一筆」とること、根本、大塚氏(松岡、国衆)を扶持した行為についても小野崎越前守に繰り返し弁明している。宿老間の対立があり、小野崎越前守と大塚内匠介の総論が存在していた。

小野崎越前守との関係修復が大きな課題として存在。江戸道徹が根本氏と大塚氏を扶持。後に16代佐竹義舜と山入氏との抗争が生じ、江戸氏、小野崎3家は山入氏に加担した。

## (2) 部垂の乱

宇留野氏は佐竹14代義俊の4男義公の子義久の後佐竹16代義瞬の3男義元が継ぎ宇留野四郎と称した。宇留野四郎義元は享禄2年(1529)、小貴氏から部垂城を奪い、実兄の佐竹17代佐竹義篤との間で12年に及ぶ戦いを招くことになった。宇留野(部垂)の当主義元は子の竹寿丸、小場義実とともに自害においこまれた。宇留野氏は佐竹本家側について義元を追討したことにより存続が認められた。1602年秋田移封により一部の人々は本家とともに秋田に住した。

## 18 藤原姓小野崎氏支流根本氏

名字全国246位茨城県8位。

佐竹氏が小野崎氏を傘下に加える過程でその庶流にあたる根本氏も佐竹氏の勢力下に入ったとみられ、戦国期の佐竹家臣として、久慈郡西東衆に根本宮内正の名が、佐竹家中の衆として根本紀伊守の名が確認される。佐竹氏の陸奥国南郷支配の拡大に活躍した武将として根本掃部右衛門尉の名が見え陸奥国南郷、花園の地に25貫、堤に25貫計50貫を領した。

### (1) 秋田藩士根本氏【小野崎分流】

佐竹氏に仕え1602年(慶長7年)佐竹義宣の秋田天封に根本氏のうち根本為通、為行ら随行し、最初に転封後の分家も含めて8家の家系が小野崎分流たる秋田藩士根本氏として続いた。この他平氏根本氏、藤原氏流など数流も確認される。

- 根本為行の家系、 小野崎分流で秋田藩士
- 為行流の掃部助賢行の次男勝行の家系
- 為行流の三男通貞の家系、 仙北郡刈和野に存続している。
- 根本三郎右衛門の家系、 為通の代に秋田大館に移住。
- 根本日向の家系、 小兵衛の代に秋田に移住。
- 根本石見守の分流、 秋田藩士
- 根本因幡の家系、
- 根本新蔵人の一族

### (2) 水戸藩士根本氏(小野崎分流)

水戸藩に仕えた家系もあり子孫からは根本新平が輩出されている。

## 尊王志士・義民としての根本氏

根本新平—水戸藩士、敦賀で斬首、贈正五位。

根本新之介—新平の弟、天狗党鹿島落ち、下総国岩井で斬首。21歳

根本清—水戸藩士、目付同心、安房勝山で獄死。25歳

根本六三郎—天狗党に加わり部田野で傷を負い自決、22歳。

根本三陽之介—上土木内静社神官、天狗党に加わり束縛され獄死、42歳

水戸藩士—根本益親、根本一之介、根本益行、根本益習、(天狗党側獄死)

百姓—根本市太郎、根本熊太郎【敦賀で斬首】儀之衛門【佃島で獄死】天狗党

## 18 藤原姓小野崎氏支流根本氏

名字全国246位茨城県8位。

佐竹氏が小野崎氏を傘下に加える過程でその庶流にあたる根本氏も佐竹氏の勢力下に入ったとみられ、戦国期の佐竹家臣として、久慈郡西東衆に根本宮内正の名が、佐竹家中の衆として根本紀伊守の名が確認される。佐竹氏の陸奥国南郷支配の拡大に活躍した武将として根本掃部右衛門尉の名が見え陸奥国南郷、花園の地に25貫、堤に25貫計50貫を領した。

### (1) 秋田藩士根本氏【小野崎分流】

佐竹氏に仕え1602年(慶長7年)佐竹義宣の秋田天封に根本氏のうち根本為通、為行

ら随行し、最初に転封後の分家も含めて8家の家系が小野崎分流たる秋田藩士根本氏とし

て続いた。この他平氏根本氏、藤原氏流など数流も確認される。

- 根本為行の家系、 小野崎分流で秋田藩士
- 為行流の掃部助賢行の次男勝行の家系
- 為行流の三男通貞の家系、 仙北郡刈和野に存続している。
- 根本三郎右衛門の家系、 為通の代に秋田大館に移住。
- 根本日向の家系、 小兵衛の代に秋田に移住。
- 根本石見守の分流、 秋田藩士
- 根本因幡の家系、
- 根本新蔵人の一族

## (2) 水戸藩士根本氏 (小野崎分流)

水戸藩に仕えた家系もあり子孫からは根本新平が輩出されている。

### 尊王志士・義民としての根本氏

根本新平—水戸藩士、敦賀で斬首、贈正五位。

根本新之介—新平の弟、天狗党鹿島落ち、下総国岩井で斬首。21歳

根本清—水戸藩士、目付同心、安房勝山で獄死。25歳

根本六三郎—天狗党に加わり部田野で傷を負い自決、22歳。

根本三陽之介—上土木内静社神官、天狗党に加わり束縛され獄死、42歳

水戸藩士—根本益親、根本一之介、根本益行、根本益習、(天狗党側獄死)

百姓—根本市太郎、根本熊太郎【敦賀で斬首】儀之衛門【佃島で獄死】天狗党

## 佐幕派の根本氏

根本新八郎 上府使役。結城寅寿に随い、天狗党と対立するが捕らわれの身となり、安政2年（1865年）、水戸赤沼獄で死去する。

結城寅寿—水戸藩家老で2018年は寅寿生誕200年。9代藩主斉昭に才能を認められ、25歳の若さで家老に抜擢された。しかし、斉昭の怒りを買って失脚、39歳の若さで処刑された。

### （3）江戸幕臣 紀姓根本氏

江戸の幕臣、紀正成が根本氏を呼称する。

### （4）江戸幕臣 源姓根本氏

江戸幕臣のうち、源氏を名乗る根本氏については「寛政重修諸系譜」に記載がある。

## 小野崎氏まとめ

佐竹氏に小野崎通長が臣従して興亡800年を経た。かつて真弓千石と言われた里川地域に楔を打ち込んだ形のこの台地から久慈郡一帯の肥沃な平野を眺望すると人類興亡の歴史とゆうものがいかに流砂のごとく変転きわまりないものであったかまことに感慨無量である。

小野崎城は瑞竜城塞群の中心的な城であり、瑞竜中学校の敷地が城址である。小野崎氏山尾城に退去後、城は今宮氏や小野氏などの佐竹一門やその旗本の屋敷となった。一族はこの地を去り、山尾小野崎宗家、額田、石神にわかれ、石神小野崎氏以外は佐竹宗家によって滅ぼされた。又小野崎氏分流の那珂氏、{江戸氏}、藤原系戸村氏も滅亡した。川野辺氏は南北



朝の戦い後、佐竹の家臣となった。

藤原秀郷流小野崎氏は悲劇の一族と言えるのでわないだろうか。